

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2018年06月

物理で考える資産運用
(⑦ 作用・反作用の法則)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com

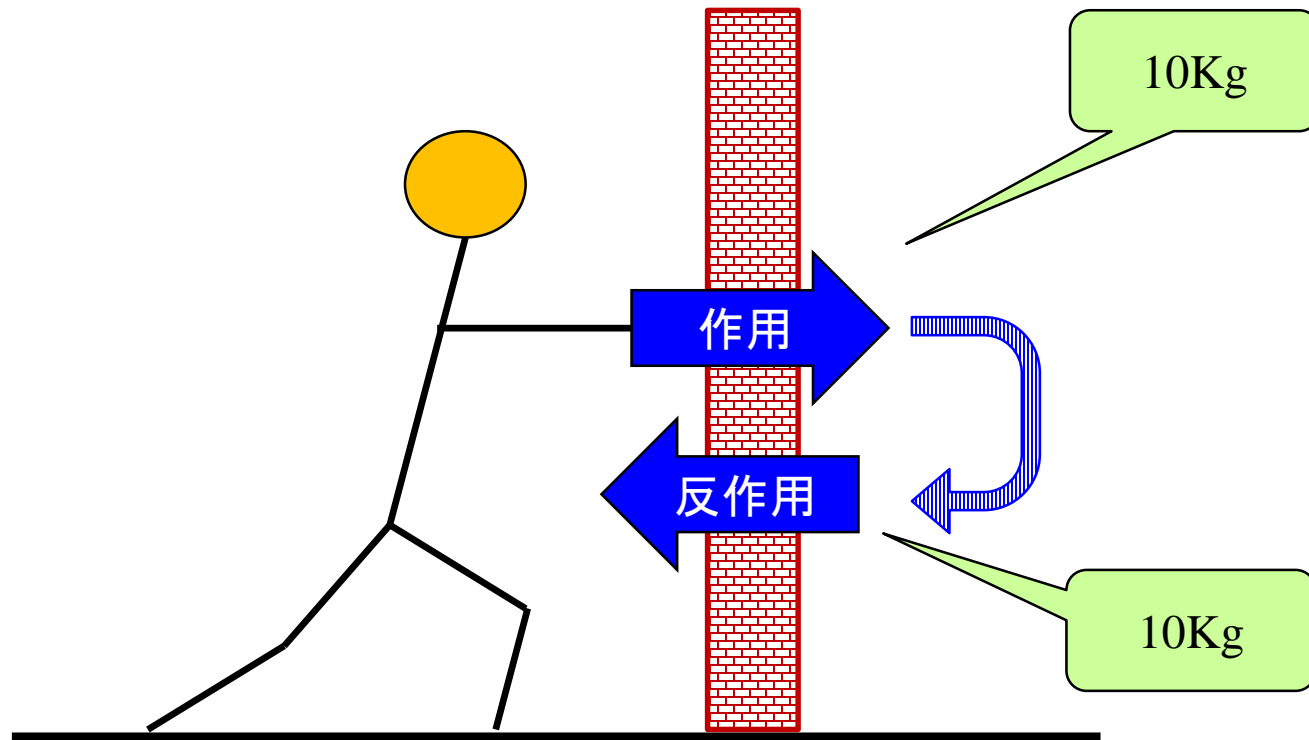


ピカイチ先生

ピカイチ先生

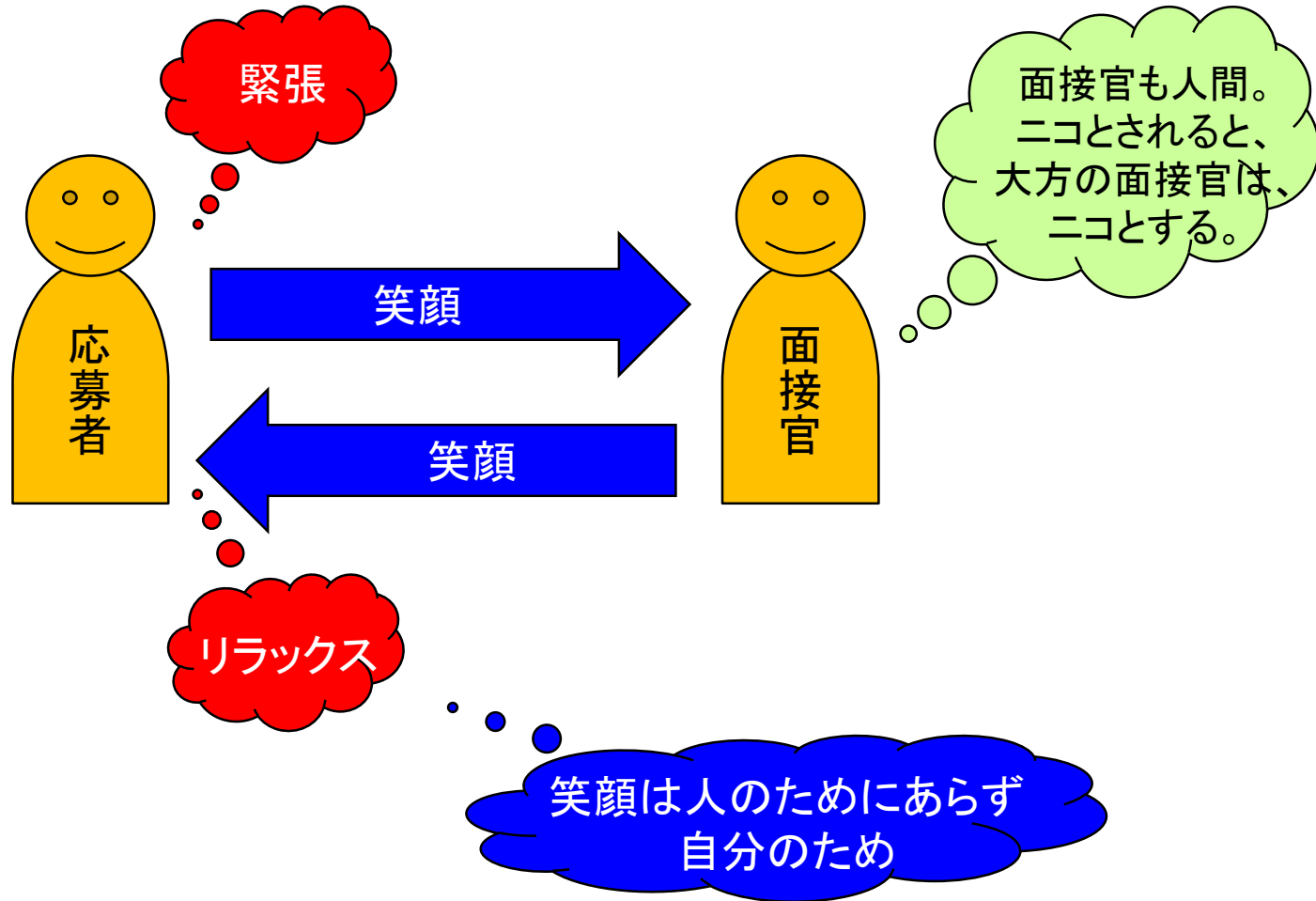
検索

「作用・反作用の法則」とは？



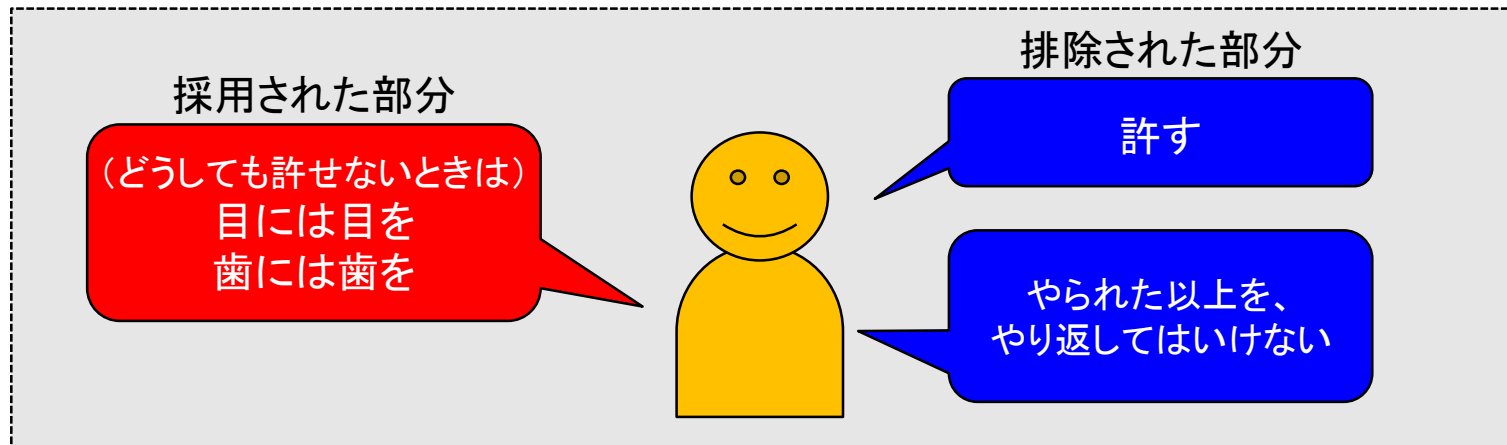
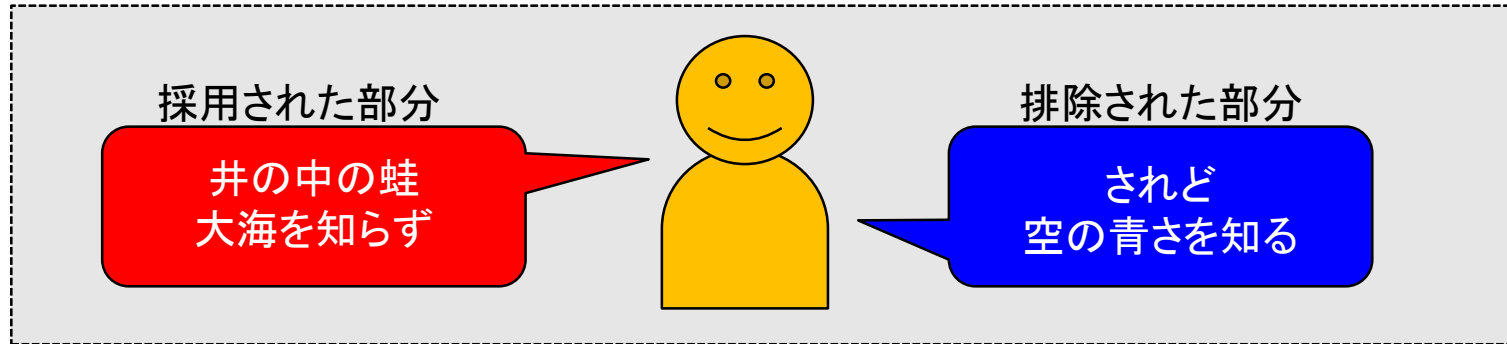
「作用反作用の法則」の応用

●面接会場にて



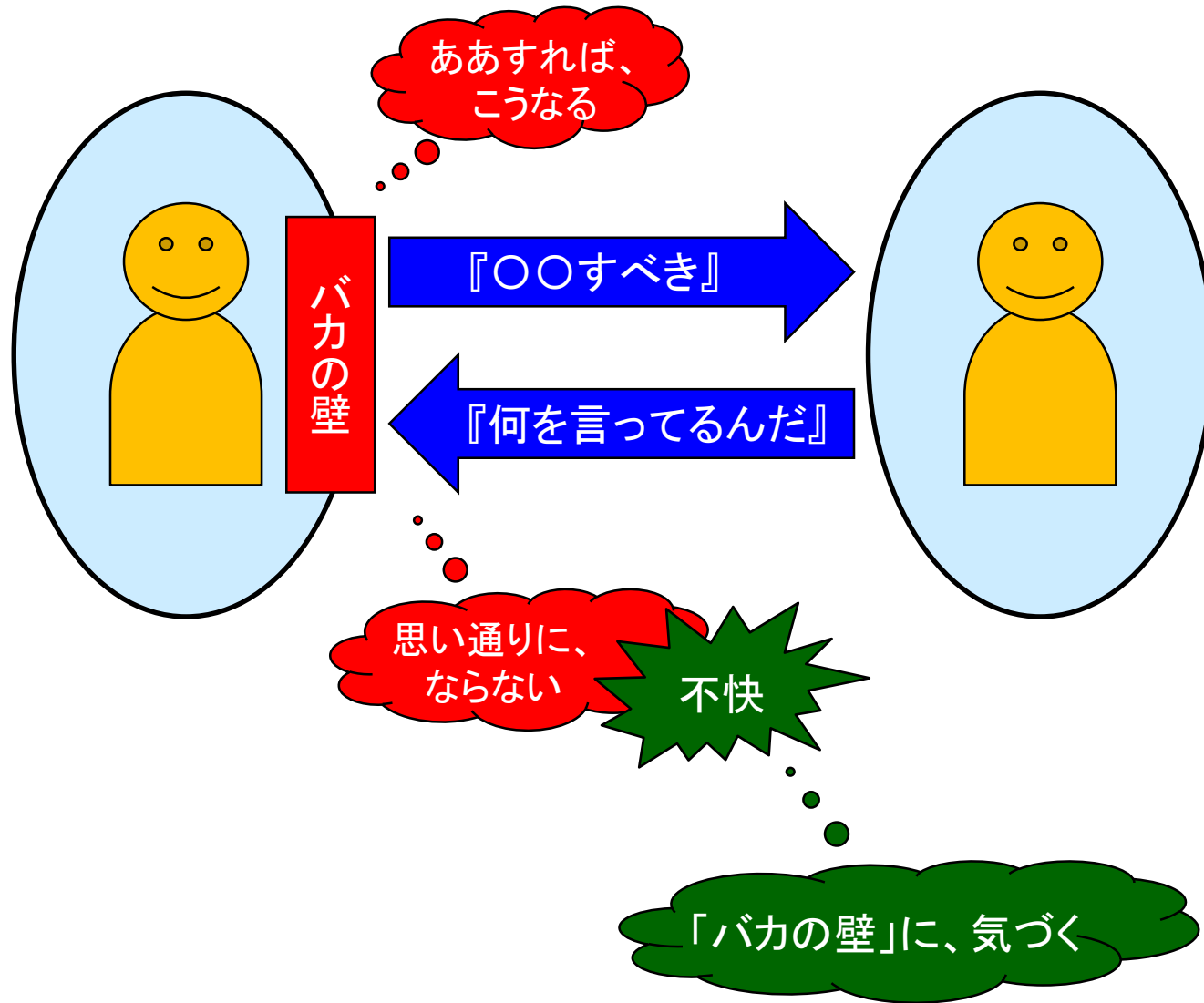
「作用・反作用の法則」の悪用

●流行言葉にて

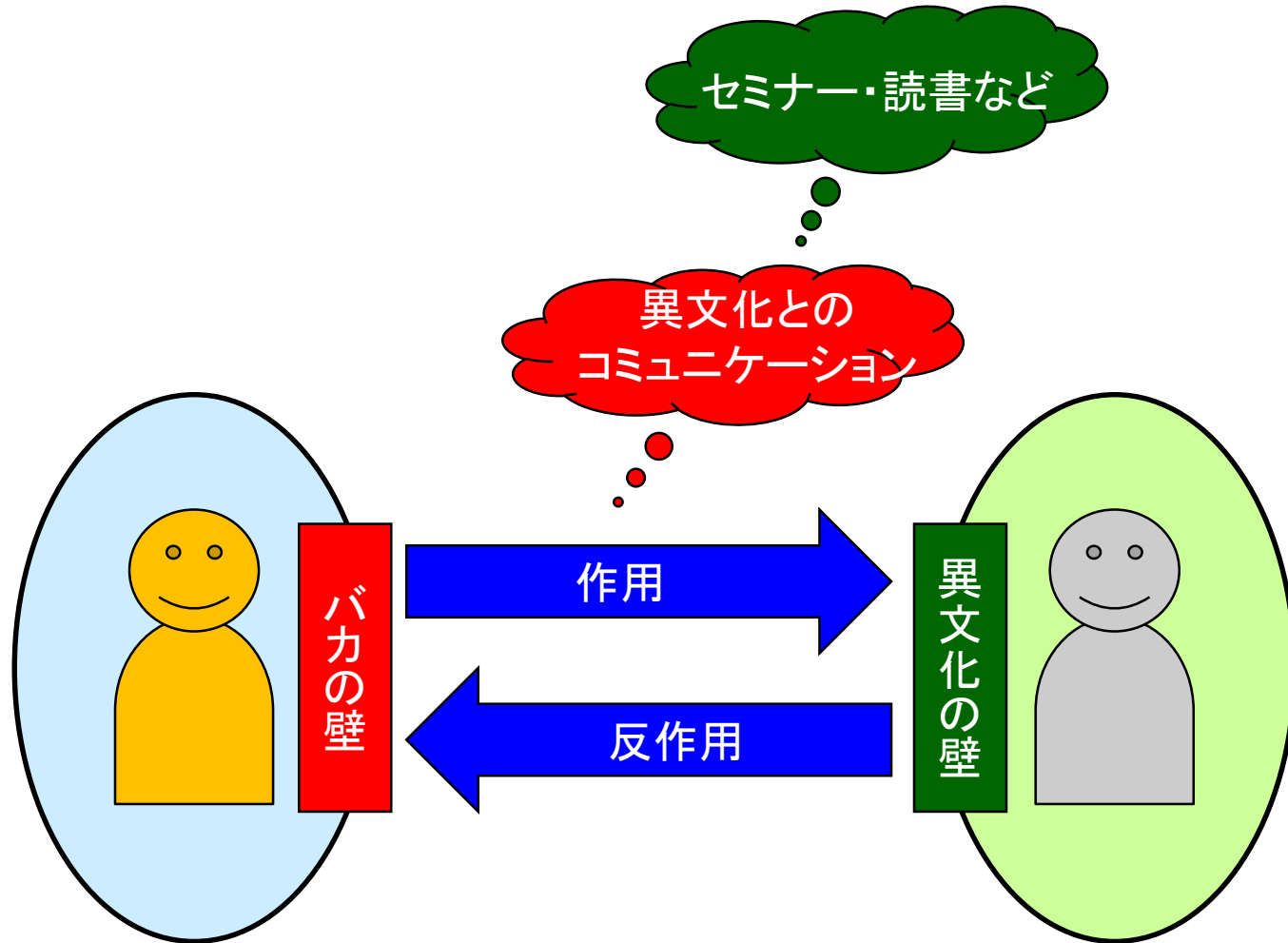


われ思う、ゆえにわれあり。
思うことはつねに変わる、ゆえにわれはつねに変わる。
(デカルト)

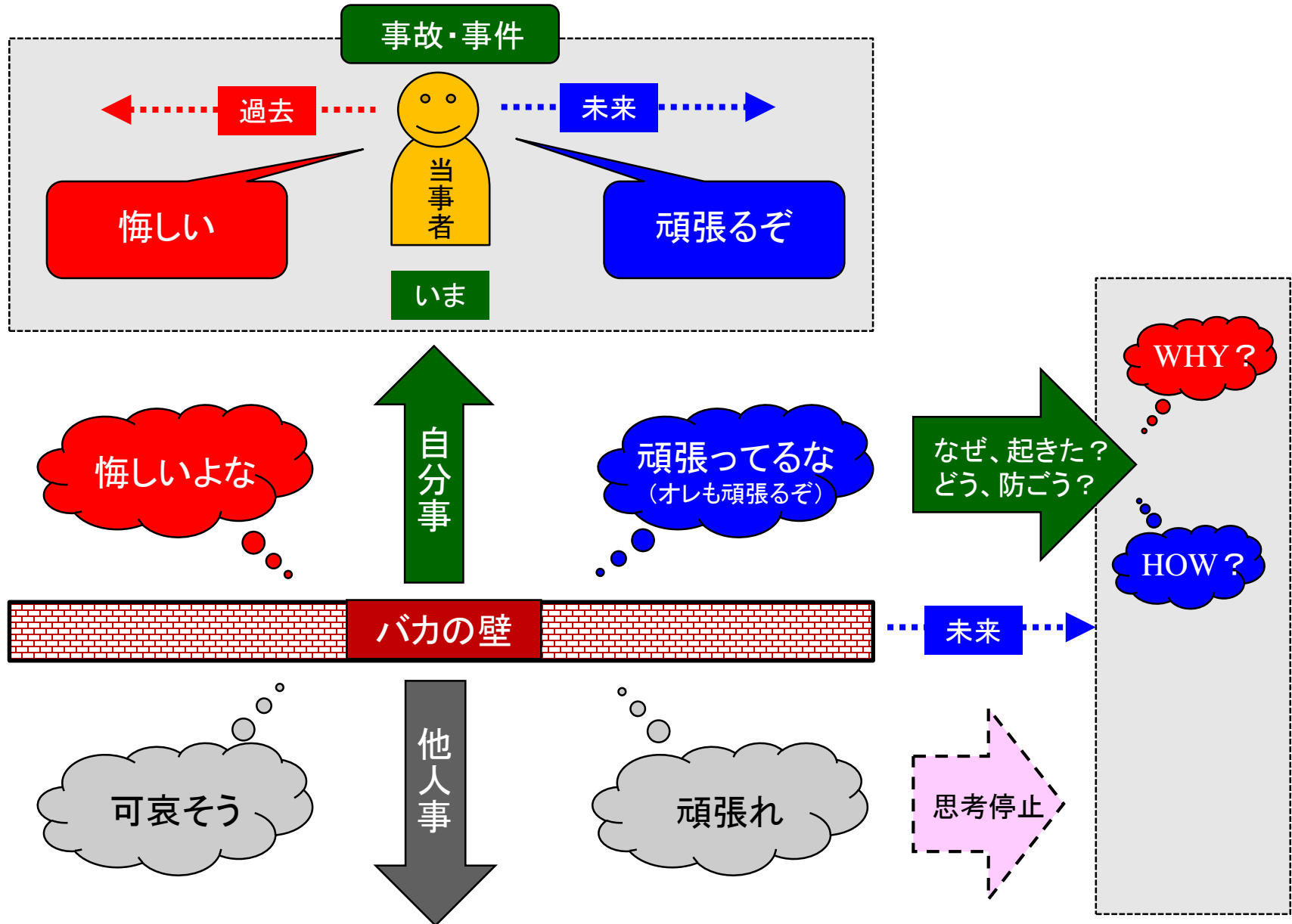
反作用から「バカの壁」を知る



「バカの壁」を知る「作用」



「当事者」として考える



「ヤヌス」



ヤヌス(ヤヌス Janus)は、ローマ神話の出入り口と扉の守護神。前と後ろに反対向きの2つの顔を持つのが特徴の双面神。物事の内と外を同時に見ることができた神。表現上、左右に別々の顔を持つように描く場合もある。一年の終わりと始まりの境界に位置し、1月を司る神である。

入り口の神でもあるため、物事の始まりの神でもあった。1月の守護神であるのは、1月が入り口であり、年の始まりでもあったためである。それから来て、過去と未来の間に立つという説明もする。その役割は、日本の年神によく似ているが、直接の関連性はない。

他の著名な神と異なりギリシア神話にはヤヌスに相当する神はいない。英語で1月をいうJanuaryの語源(ヤヌスの月)でもある。

(Wikipedia より)

【読書1】 「先代」から学ぶ

【テーマ】
「集中型システム」から「分散型システム」へ

●「時間」を軸に学ぶ



【1】「先代」から学ぶ

【2】「新しい世代」から学ぶ

●「宗教」を軸に学ぶ

【3】「イスラム教」から学ぶ

【4】「仏教」から学ぶ

「先代」から学ぶ (1/2)

中年男性が新しい文化、行為、風俗にいつも批判的で否定的なのは、猿社会も人間社会も変わらないようです。(中略)

経験の壁が新しいことを拒み、時間とともにしだいに少数派に追い込まれていくわけです。

ただ、私は時代遅れであることを批判しようとは思いません。加齢とともに時代変化へのアンテナや対応能力がさびついてくるのは、一般的に生理的なことで致し方ないところです。

動的な反射神経やフットワークはどうしても衰えてきます。そのかわり知識や経験、判断力といったスタティック(静的)な能力は若いときと比較にならないほど堆積します。

だから、それはそれでいい。アンテナ役になってくれる若い人を身辺においておくなど、手当の方法はいくらでもあるからです。

問題は、自分の中に形成された経験則や既成概念でしか新しいモノやコトをはかれなくなってしまうことです。自分のものさしをいつのまにか絶対視して、それだけで若者や彼らの行動、文化を裁断してしまうことが問題なのです。

『百匹目の猿』(船井 幸雄)より

「先代」から学ぶ (2/2)

近代の本質は「均質と効率」、その拡大再生産にあると私は考えています。均質と効率はパラレル(平行)というより因果関係に近いものです。均質なものを生み出していくのが社会にとってもっとも効率的というぐあい입니다。

いままでの発想では、工場では均質なものを画一生産するのがいちばん生産性が高いのです。そのため流れ作業という効率的なラインが必要とされるわけです。

学校では平均的な優等生の育成が要求されます。そのために没個性の画一的な教育が必要となるわけです。いいかえれば、異質なものや非効率なものは排斥される社会です。さらに平易に言えば、「モア・アンド・モア」がそうです。さっき述べた「もっと、もっと」の思想です。物質的な増大が根幹にあるのです。

また個の欲望とエゴの肯定も近代社会の特質でした。所有欲、金銭欲、権力欲、名誉欲、快楽、これらの追求を是とする価値観です。個人が多くのモノを所有し、財をためこみ、権力を握り、快適さをひたすら追求する ---- これらはみんな善だったのです。

『百匹目の猿』(船井 幸雄)より

【読書2】 「新しい世代」から学ぶ

【テーマ】
「集中型システム」から「分散型システム」へ

●「時間」を軸に学ぶ

【1】「先代」から学ぶ



【2】「新しい世代」から学ぶ

●「宗教」を軸に学ぶ

【3】「イスラム教」から学ぶ

【4】「仏教」から学ぶ

「新しい世代」から学ぶ (1/2)

僕たちは人間として生きてゆく途中で、子供は子供なりに、また大人は大人なりに、いろいろ悲しいことや、つらいことや、苦しいことに出会う。

もちろん、それは誰にとっても、決して望ましいことではない。しかし、こうして悲しいことや、つらいことや、苦しいことに出会うおかげで、僕たちは、本来人間がどういうものであるか、ということを知るんだ。

心に感じる苦しみや痛さだけではない。からだにじかに感じる痛さや苦しさというものが、やはり、同じような意味をもっている。

健康で、からだになんの故障も感じなければ、僕たちは、心臓とか胃とか腸とか、いろいろな内蔵がからだの中にあって、平生大事な役割を務めていてくれるのに、それをほとんど忘れて暮らしている。

ところが、からだに故障ができて、動悸がはげしくなるとか、おなかが痛み出すとかすると、はじめて僕たちは、自分の内蔵のことを考え、からだに故障のできたことを知る。からだに痛みを感じたり、苦しくなったりするのは、故障ができたからだけれど、逆に、僕たちがそれに気づくのは、苦痛のおかげなのだ。

(次頁につづく)

『君たちはどう生きるのか』 (吉野 源三郎)より

「新しい世代」から学ぶ (2/2)

苦痛を感じ、それによってからだの故障を知るということは、からだは正常の状態にいないということ、苦痛が僕たちに知らせてくれるということだ。もし、からだに故障ができていのに、なんにも苦痛がないとしたら、僕たちはそのことに気づかないで、場合によっては、命をも失ってしまうかもしれない。

実際、むし歯なんかでも、少しも痛まないでどんどんウロが大きくなってゆくものは、痛むものよりも、つい手当てがおくれがちになるではないか。

だから、からだの痛みは、誰だって御免こうむりたいものに相違ないけれど、この意味では、僕たちにとってありがたいもの、なくてはならないものなんだ。

それによって、僕たちは、自分のからだに故障の生じたことを知り、同時にまた、人間のからだは、本来どういう状態にあるのが本当か、そのことをはっきりと知る。

同じように、心に感じる苦しみやつらさは人間が人間として正常な状態にいないことから生じて、そのことを僕たちに知らせてくれるものだ。そして僕たちは、その苦痛のおかげで、人間が本来どういうものであるべきかということ、しっかりと心に捕えることができる。

『君たちはどう生きるのか』 (吉野 源三郎)より

【読書3】 「イスラム教」から学ぶ

【テーマ】
「集中型システム」から「分散型システム」へ

●「時間」を軸に学ぶ

【1】「先代」から学ぶ

【2】「新しい世代」から学ぶ

●「宗教」を軸に学ぶ



【3】「イスラム教」から学ぶ

【4】「仏教」から学ぶ

「イスラム教」から学ぶ (1/2)

内田 世界のフラット化は、欲望の標準化を目指します。グローバル資本主義の理想は、世界中の人が同一の商品に対して同一の欲望を抱くことだからです。

みんなが同じものを欲しがれば、同一仕様の製品を大量に市場に投入して、企業は莫大な利益を上げられる。欲望が平準化すればするほど、製造コストは下がり、企業の利益は増える。だから、グローバル資本主義はその本質的趨勢として、消費者が同一物を欲望するように仕向ける。

食品についても同じです。(中略)固有の食文化を潰して、世界中の人間が同じような食べ物を主食とした方がいいんです。そうなったら、単一作物だけを大量作付けすればいい。加工工程も最小化できます。極限までいけば、七十億全員がパンを食べ、牛肉を食い、オレンジをかじるという話になる。

グローバル資本主義はそこを目指しているんです。良い悪いじゃなくて、利益の最大化は資本主義企業の本性ですから「止めろ」と言っても始まらない。

(次頁につづく)

『一神教と国家』(内田 樹、中田 考)より

「イスラム教」から学ぶ (2/2)

内田 でも、僕は簡単にそうはゆかないだろうと思うのです。ここでも生身の身体がそれにブレーキをかける。食文化というのは飢えないための人類の知恵だからです。

先ほどもハラールとコーシエルの話をしましたけれど、ああいう食物禁忌には別に科学的な根拠があるわけではないですね。理屈を言う人がいますけれど、僕は根拠がないと思う。

この食べ物が清浄である、これが穢れているというのは完全に人間が創り出した虚構です。個々の清浄不浄の基準は恣意的に定められたものです。

でも、集団ごとに清浄不浄の基準を定めなければならないという理屈には人類学的必然性がある。結果的には、それぞれの集団が「食べてよいもの」と「食べてはならぬもの」を違う仕方では区分することによって、全人類が同じものを食べないようにしくみを作っているのです。

『一神教と国家』（内田 樹、中田 考）より

【読書4】 「仏教」から学ぶ

【テーマ】
「集中型システム」から「分散型システム」へ

● 「時間」を軸に学ぶ

【1】「先代」から学ぶ

【2】「新しい世代」から学ぶ

● 「宗教」を軸に学ぶ

【3】「イスラム教」から学ぶ



【4】「仏教」から学ぶ

「仏教」から学ぶ (1/2)

養老 つまり、予測されたことをやるのでは、生きることにならないじゃないかということですよ。その意味では死んでいるんですよ、日本人は全部。

スマ チャレンジはないし、面白くもない。ただ、自慢になるだけ。「私はアメリカに行った。三回も」とかね。「サイパンにも行きました」と。お正月はハワイに行くのがステータスなんだ、と。

なんとも滑稽ですよ。そんなものは自慢にならないだから。アジア人はお金もなくて、貧乏でと、そういう差別的なことも口にしたりする。でもそんなこと言われても、屁とも思わない。生きている人に差別されたら、ちょっと考えますけどね。でもやっぱり、そのときは逆襲します(笑)。

司会 生きている人間に接しないと、生きているという実感は湧かないものですか。

スマ うん。

たとえば私が「きょうは疲れた」と言う場合、相手が大人なら「ぜんぜんわかってくれなかった」という意味なんですよ。身も心もぐったりする。だけど子供と過ごして「もうくたくた」と言う場合は、「やられた」ということなんです(笑)。「負けた」「やられた」というのは、負けたといえど負けなんですけど、心はいきいきしている。からだのほうは、もうけっこうたいへんなんだけど。

『希望のしくみ』(養老 孟子、アルボムツレ・スマサーラ)より

「仏教」から学ぶ (2/2)

スマ 自分の生き方が、他人の何かの役に立っていると思えば、そこで生きる意味が成り立ちます。

ある中学生が、こんな作文を書きました。

「人は何のために生きるのか」と、いろいろな人に聞いてみたけど、誰も答えてくれなかった。でも、あるお坊さんが、「まず自分が楽しくなりなさい。それから皆にも楽しみを与えることだ。それ以外には何もないよ」と教えてくれました。だからこれからは、自分が楽しく生きよう。まわりにも楽しみを与えてやるぞ。

彼はこれからそうやって生きていこうと、決めたんだそうです。

私は、立派だと思ってね。

この子には、もはやわれわれが言うことは何もないんですよ。「悪いこととしてはいけないよ」とか、「ルールを守りなさいよ」なんて教える必要はない。本人が毎日、「何をしたら楽しいだろう？ どうすれば、皆を喜ばすことができるだろう？」と考えている以上、誰に強制されなくても、社会のルールぐらい守ります。法律も道徳も校則も、この子には必要ない。

小さな赤ちゃんも、もうちょっと大きくなっても、同じことを一生懸命やってますよ。自分をかわいがってほしいから、ニコニコ笑ってなんとかまわりを楽しませてるんですよ。

大人になればなるほど、愚かになっていくんでしょうか(笑)。なんだか、頑張って、頑張って、子供に還ろうとしているような気がしてきました。

『希望のしくみ』（養老 孟子、アルボムツレ・スマサーラ）より